演劇レーベルBö-tanz：〒201-0013 狛江市元和臭 2-15-15-205
e-mail: info@bo-tanz.org / Tel & Fax: 03-3488-1224
http://bo-tanz.org

ANALYTICAL REPORT 解析報告

演劇レーベルBö-tanz XXXII

てんろうしんせい

天狼新星

Sirius: Hyper nova

-RESTORED-

2009年 9月26日-10月1日
@東長崎・てあとるらぼう

第二十一回池袋
演劇祭参加作品

2010年、日本。

大容量の情報を超高速で受け渡しが出来る
通信技術<光ソリトン通信>が、
今まさに世界規模で始められようとしていた。
しかし、光ソリトン通信網（SOCOM-net）
の中には通信の障害となるばかりでなく、
接続された端末をも破壊する可能性を秘めた Solitary packet
（ソリタリー・パケット）と呼ばれる
<正体不明のノイズ>が存在していた…

Solitary packet…
自立的に自己増殖が可能な独立した情報。
それは意図的にネットの上に流されたものなのか？
それとも偶発的にネット内に生じたものなのか？
もし意図されたものだとしたら、
誰が、一体何の目的で創造したものなのか？

様々な憶測が飛び出す中、
Solitary packet の調査を行っていた対策チームが
最後にたどり着くことになる結論とは…

<その原因は… 『未来』にある!!>

やがて世界は焼き尽くされる…

STAFF:
作・演出／はなださとし
照明／島田唐和［S. P. C］
音響／畠山慎一
映像／中島一成［Turtlemusee］
映像OP／原裕一郎
舞台装置／高橋工務店
衣装／パトリック・ファブリック
制作／演劇レーベルBö-tanz
制作協力／Turtlemusee

SOCOM-Japan Solitary Packet（ソリタリー・パケット）問題対策チーム

岡昌生（おかゞまさお）／嶋田貴秀［客演］
大河内により対策チームに雇用された任期付き非常勤社員。ゴルフに来る前は、同じ…ピュータ関連会社でSEをしていたらしいが、実は某有名大学大学院中退という中途半端な学歴を持つ。大学院時代は量子コンピュータの研究をしていたのって言うんだからすごい。

多川彩（たがわ・あや）／羽鳥友子［客演］
大河内により対策チームに雇用された任期付き非常勤社員。「クラッキングの女王様」っていうか、すげーハッカー。「つっけんどん」な性格のお方だが、よく見ると意外好じだったりもする。

澤山慎二（さわやま・しんじ）／磐田健一［客演］
同じく大河内により対策チームに雇用された任期付き非常勤社員。「秋葉系」なファッションでくる「ヲタ系」に異常な執着を見せるあたり、真性の「オタク」といったところか。

吉谷紗英（よしたに・さえ）／佐藤光［劇団時計］
対策チームの「良心」と呼ばれることもあるできたお方。口数は少ないが、絶めるべきところは、びしっと絶めちゃいますから！

大河内未紀（おおこうち・みき）／眞千子［客演］
Solitary Packet 問題対策チームのチームリーダー。大手情報関連会社からヘッドハンティングにより入社。優秀ではあるが、胸の広いことにコンプレックスを抱っているような、いないような。

松田由美子（まつだ・ゆみこ）／戸張智香［客演］
対策チーム全体の秘書兼雑用係。コンピュータや通信システムに関しては当然詳しく、ええ感じの「和まし系」キャラ。マジで頭のネジが飛んでいるのかも（ノ´∀`）ノ

SOCOM-Japan（ソーコム・ジャパン）

SOCOM-Japan は光ソリトン通信（Soliton Optical Communication）の基盤開発、通信サービスの提供を行っている合弁会社。Soliton Optical Communications（SOCOM 社：本社はカリフォルニア州ロサンゼルス。そして、基盤研究センターは同州のサンディエゴにある）の日本ブランチという言い方が正しい。

所在地は千葉市美浜区であるが、本部は SOCOM-Japan のことを単に "TOKYO" と呼んだりする。これはヨーロッパ・ブランチである SOCOM-EU のことを、実際はオランダのユトレヒト近郊にあるにもかかわらず、「アムステルダムに連絡を取れ！」なんて言っても通じちゃうことからも分かるよね。っていうか、分かってよ。「千葉にあるのに TDL&TDS」みたいな感じで…

Optical Soliton Communication（光ソリトン通信）

[illegible]

…通信プロトコルの仕組みをある程度理解した上でデータの盗聴が行われたということだ。では、誰がそれをやったのか？
Solitary Packet はいかなる発信源を持たないネットワーク上のノイズだという事が分かっている。つまり、Solitary Packet 自身が、それをやったんだ。Solitary Packet は通信プロトコルを理解する「知性」と、サーバに侵入しようとする「意志」を持っている…

三流SF的悪夢を終焉させるためには Solitary Packet を駆逐する他はない

Hologram Cube Memory（ホログラムキューブメモリー）

米国オプティカル・フィジックス社が開発した透明な立方体の記憶装置。「三次元ホログラム・メモリー」とも呼ばれる。たった1インチ立方の有機ポリマーの小さなキューブに莫大な量の情報（約 800 PB：800 ペタバイト＝800,000 テラバイト）を記録できる。単に大量のデータを記録するだけなら、従来の磁気ハードディスクだって決して負けてはいないが、大きく異なっているのは、このホログラムキューブが誇り驚くべき記録速度である。フェムト秒（1 秒の 10 の 15 乗分の 1）レーザーをリファレンスビーム（参照光）として光通信データをダイレクトに書き込むことにより、1 T bits/sec という超高速記録が可能になったのである。これは、光ソリトン通信の通信速度（ベスト・エフォート）と同じ速さで、データセーブできるということを示している。この記録装置を使えば、光ケーブルネットワークの中に存在する膨大なノイズ、すなわち＜Solitary Packet＞を、リアルタイムで光ケーブルからセーブ、というか、文字通りダンプ（廃棄）できる事になる。当然、大河内率いる SOCOM-Japan の Solitary Packet 問題対策チームは、この最新型のメモリーを用いて＜Solitary Packet＞の捕獲を試みる…

佐藤さん（さとう・さん）
／佐野達哉［眼鏡マスカラス］

バッピィ・ケータリング・サービス（お菓子のケータリング会社）の配達員。SOCOM-Japan の Solitary Packet 対策チーム専用車で、毎日大量のお菓子を配達しているようです。っていうか、本人自身、本当にお菓子が大好っていうか、駄菓子も）大好きみたいです。あと、エロい話しも（ε∇ε）

基本なつなぎに同系色のキャップ、履いているスニーカーまで同色という粋で細背なお兄さんですが、ひょんな事から「熱んな事」になっちゃうらしいです…

市川麻美

量子通信システム Faint voice（フェイント・ヴォイス）：か細き声

市川好美

2049 年、太陽系の外を探索するという目的で、一機の探査機が地球から飛び立った。探査機はある惑星を一直線に目指していた。シリウスだ。当時シリウスは奇妙な挙動を示し始めていた。微妙な明るさやスペクトルの変化であったが、学者の中にはシリウスの爆発を危惧する者も少なからず現れて… それで探査船が打ち上げられることとなったのだ。探査機は巨大なパラボラアンテナから、日々シリウスに関してのデータを送り続けていた。

その探査機にはひとつの「生体部品」が組み込まれていた。「生体部品」、それは人間と言ってもいいものだった。そう、「ひとりの少女」だった。人工的に作られた細胞を分割し、それらを量子的にエンタングルメント、すなわち「絡み合い」の状態にして、超光速通信の核とする。いわゆるEPR（アインシュタイン、ポドルスキー、ローゼン）ペアの応用だ。一方は探査船に、そしてもう一方は発射基地の地下深くに設置された…

「双子のシンクロニシティ」… 一卵性双生児の間にはテレパシーのようなものが存在していて、距離に関係なく、その情報は瞬時に伝達される。例え何光年離れていようと… つまり情報伝達が光の速度を超える。常識に反しているようだが、人間の「意識」が量子力学的な作用であること、そして、その双子が量子的に絡み合っていることに基づいて考えれば… 光の速度を超える情報伝達も不可能ではない…

多分に突飛なアイデアと言えるものではあり、当然関係した科学者の大半が懐疑的であった。しかし、それ以外に頼るべき方法はなく…

シリウスが爆散し、強力な電磁波が津波のように地球を襲うとする。その津波に速度は光の速度である。それをシリウスの近くで、察知してパラボラアンテナで地球に向け情報発信をしたとしても、地球に届くのは電磁波の津波とほぼ同時刻となる。それでは何の警告にもならない。シリウスの爆発を前もって知らせるためには、光の速度を超える情報通信が必要だった。それが「分離されたひとつの細胞から生育された双子」だったというわけだ。

そして、その撃鉄システムの名称こそ「Faint voice、か細き声」だった…

<シリウス、そして超新星爆発の可能性>

シリウス（Sirius）：おおいぬ座のα星（α Canis Majoris）。天狼星と呼ばれることもある。-1.5 等星で、夜空の中の星（月を除く）では最も明るい。地球からの距離は 8.6 光年と恒星としては極めて近い。また、シリウスは二連星（双子星）である事が明らかになっている。この二連星の一方は「白色矮星（ホワイト・ドワーフ）」という死んだ星と化している。この白色矮星が発見されたのは 1862 年のことで、「シリウス B（伴星）」と呼ばれることになった。これに対応し、シリウスは「シリウス A（主星）」となる。この二つのシリウスは 2 億年ほど前に同時に生まれたにもかかわらず、その片方は既に死んでしまっているということなのだ。

その昔、「Red Sirius：赤いシリウス」という学説が有名になったことがある。「シリウスは今でこそ青白く輝くが、昔は赤い恒星であるが、古代のローマじゃ「赤い犬」と呼ばれていた。2000 年そこそこで、つまり、天文学的時間尺度で「ほんの一瞬」のうちに、赤から青白い色になったのは、急激な温度上昇によるものではないか。そして、その温度上昇こそシリウスの終焉、つまり「超新星爆発」の兆候ではないか云々」という事らしい。シリウスは宇宙で言えばお隣さんみたいなものなので、それが超新星爆発を起こしてしまったら、大変な事態となってしまう。だが、シリウスA（主星）の質量は太陽の 2 倍程度であり、恒星の進化の順路」から考えて、超新星爆発を起こすには質量が明らかに足りない。よって、爆発を起こす危険性は低いと考えられ、安心してもよいのだという。

しかし、シリウス超新星爆発については Red Sirius とは異なるもう一つの学説が存在する。それは白色矮星であるシリウス B が超新星爆発を起こすという仮説だ。これはシリウスBがX線を放射し続けていると言う観察的事実に基づくものである。X線の放射は、水素やヘリウムなどだがのガスがシリウスBへ吸い込まれることに因る。より近接し合った連星では主星がガスの供給源になるが、シリウスのように離れた連星系（平均で 36 億 km も離れており、これは太陽系で言えば太陽から海王星までの距離に相当する）ではそのようなことは考え難く、ガス供給がどの様な形で行われているのか、今もって謎となっているそうである。ひとつの解釈は、シリウスBが矮星化する際に失った太陽 6 個分の質量が連星の重力均衡点、すなわちラグランジュ・ポイントに一時的にトラップされ、その一部が 10 万年かけて、ゆっくりとシリウスBに戻ってきているというものである。当然、戻ってくるガスの質量は太陽の 5 分の 1 程度と決して多くはないが、これだけの重さの水素とヘリウムが、このままシリウスBに降り積もることになれば（燃料を供給していることと同じなので）当然温度上昇は避けられない。しかも、白色矮星は普通の恒星のような柔軟性がない、つまり膨張して温度を下げると言ったサーモスタット機構が働き辛い構造になっているらしいのだ。だから、この温度上昇が引き金となり、内部温度の上昇が止まらなくなる。そして、炭素のコアに火がつき、白色矮星のデフラグレーション（爆燃）が引き起こされるという仮説である。

この様なデフラグレーションは（正しくは「タイプ I 超新星爆発」とカテゴライズされるらしいが）一言で言えば「シリウスBが炭素核融合爆弾となり、一瞬のうちに砕け散る」事を意味している。つまり、太陽と同じ重さの核融合爆弾が、我々の地球の超真下、爆発するということなのだ。「太陽と同じ重さの核爆弾が爆発って、いったい、何？」と想像すらつかないが、そんなことらしい。ひとつの試算ではあるが、「太陽が一生かかって放出するエネルギーの 3 倍が 30 日間で放出される」事になるそうだ。そうなれば、地球もただではすまないだろう。

シリウス超新星爆発は、本当に「起こる」なんだろうか？実際、シリウスBは今日もX線を放射し続けている（一水素ガスなどがシリウスBに降り積もり続けている）のだから、「超新星爆発（シリウスBのタイプ I 超新星爆発）」はやがては訪れることになる「必然」と呼ぶべきものなのではないのだろうか。シリウスの語源はギリシャ語の「セイリオス」、意味は「焼き焦がすもの」。本当に嫌な感じの符合である…

[追記：あなたの PC に「Google Earth（グーグル・アース）」がインストールされているなら「Google Sky」でシリウスを拡大してみてほしい。オリオン座のベテルギウスもこいぬ座のプロキオンもしっかり細部まで表示されるのに、何故かおおいぬ座のシリウスだけは、肝心の部分が「クリーム色のべた塗り」で隠されていて、星自体を見ることができない。まるで、Google Earth で米軍基地が点在する沖縄の航空写真が、ところどころ（意図的に）雲により隠されているのに似ている。決して意図的に隠蔽されているのではないのだろうが、何か「嫌な感じ」である。まあ、余談だけどね…]

Cyber Force 2057 (サイバー・フォース 2057)

Cyber War（サイバー・ウォー）すなわち電脳戦のために組織された特殊コマンド部隊。個々の構成員はCyber-Soldier（Cy-Sol: サイ・ソル）または「電脳兵」と呼ばれ、自らの意識や存在をネットワーク環境中にアップロードする能力を持っている。遺伝情報・意識情報を含め生体を光ソリトン通信網に送り込むことを solitonize(ソリトナイズ:ソリトン化）というが、ソリトナイズしたサイ・ソル達は電脳空間では、戦闘服に身を包み、戦闘用ヘルメットをかぶった姿となる。なお、戦闘用ヘルメットにはカメラとヘッドアップディスプレイが付属している。各隊員からの情報、および各隊員へ送られる情報は「dB」と呼ばれる「一等通信兵」により統合管理されている。

片桐伍長／森本克己
[ストーンフィールド／回路R]

この隊の伍長。どうやら新参者らしい。性格的にきついところはあるが、その判断はすべて、軍人としては正しい。過去に何があったのかは知らないが、dBというものに不信感を抱いているようだ。

久保曹長／高橋彰規

消えた深尾大尉の代わりにリーダーに抜擢される。指揮官としての決して能力は高いとは言えないが、責任感があり、同時に縞り甲斐もある曹長である。優しく実直な性格のため、当然の如く、とんでもないことに…

深尾大尉・Hermit
／木村淳

Cyber Force 2057の指揮官。しかし、Faint voice 破壊作戦の際に、電脳空間で消息不明となる。光ソリトンネットワーク中を彷徨う彼は、自らをHermit（ハーミット：隠者）と、幾分自嘲気味に、呼ぶ。

林一等通信兵（dB）
／酒田恵美子

Cyber Force 2057の「dB」。dBとは、direct Binder（ダイレクト・バインダー）の略称であり、電脳空間で活動するサイ・ソル達を現実に直接繋ぐ者」の意である。dBは電脳部隊の保護や通信を担当する重要な役割を担っており、サイ・ソルの中でも最も電脳適合性が高い兵士が選抜される。

奥山二等兵／町野啓介
[(株)アッシュジャパン]

すべての情報を瞬時に破壊出来る「破壊コード」をロードした「インタラプタ」と呼ばれる武器を携帯する。若い兵士であり、部隊が巻き込まれた状況にピュアに混乱する。

Mission code: Faint voice

これが我々に与えられた作戦コード。
攻撃対象はうち捨てられた無人の研究施設。
この地下で未だ稼働中のコンピュータシステムを
ソフトウエアレベルで完膚無きまでに破壊せよ…

Cyber-Force（サイバー・フォース）

[現代用語の基礎知識 2050 年度版より抜粋]

サイバー・テロリズムに対するカウンターアタックのために組織された特殊部隊（「特殊電脳部隊」）。個々の構成員は Cyber-Soldier（Cy-Sol、サイ・ソル）または「電脳兵」と呼ばれる。

21 世紀の中葉、世界情勢は依然としてアメリカを中心としたグローバリニズムとそれに反抗する多数の勢力により、多極分化の様相を呈していた。それは、民族の、経済の、そして宗教の対立の上に生じた「ひとつの平衡状態」と断言できるかもしれないが、幸福な状況であるとは言い難かった。とにかく世界中、至る所で小競り合いが起きているのは事実だったから。20 世紀の終わりには一部の楽観主義者の間で「世界をひとつにするもの」と歓迎されていた「Internet」も、未だグローバルに配線された光ソリトンケーブルという形で存在していた。しかし、そのネット自体が国家単位や経済圏単位で Regional Fire Wall(RFW) という障壁で寸断されており、World Wide Web などという観念はもはや過去のものであった。この情報網の断絶も、ここ数十年繰り返されてきた「サイバー・テロリズム」または「サイバー・ウォー」の悪辣的状況から考えれば当然の帰結であろう。

ある「テログループ」が国際政治犯の釈放を求め、大国の Fire Wall を易々と越え、情報ネットワークを攪乱、ライフライン や交通・医療サービスを含む都市機能を完全に麻痺させた上、原子力発電所の制御を支配下においた。警察機関・軍事関連施設のコンピュータネットワークも同様の攪乱を受け、何の対応もとれぬまま、事態は最悪の結果に向かって突き進むことになる。その時点で、「混乱の拡大」がテロリストにとっての行動原理となっていた。国際政治犯の釈放などどうでもよくなっていたのだ。政府は国内ネットワークの、一部物理的な破壊を伴う、完全停止を決断。それ以上の混乱は避けられることとなったが、遅きに失した判断であった。すでにコントロールを失った原発のリアクタは暴走状態に陥っており、コアメルトダウンを起こし、爆発を繰り返しながら、玄武岩層を融かし岩盤の中へと沈みこみはじめていた。電気も水道も情報の供給もない中、噴火活動はおろか、住民の避難誘導もままならなかった。政府や州当局にできたのはただ祈ることだけだった。上昇気流により生成された雷雲による大量降雨にも助けられ、幸運なことにメルトダウンは 1 週間を待たずして収束の気配が見えてきた。また、コンピュータネットワークの修復も迅速に行われた。だが、その間の被害は甚大であった。たくさんの者が死に、その十倍以上の者が重篤な放射線障害を負うこととなった。。。大国の反撃は苛烈を極めた。「サイバー・テロ」を引き起こしたグループの母体組織とそれに荷担したとされる国家がすべて炙り出され、そしてその国土は、文字通り完膚無きまで焼き払われた。これを教訓としてすべての国々が情報ネットワーク上に国境を作り、その警備の強化に乗り出したが、サイバー・テロ対策を行うサイバー部隊、サイバー・フォース、もこれに呼応する設置されたものである。

テログループが引き起こしたこの未曾有のサイバーテロが、たった 7 人のクラッカーによる犯行であったというのは、驚くべきことである。7 人のクラッカーはカリブ海に浮かぶ小さな島から攻撃を仕掛けた。テロ発生から 72 時間後に行われた特殊部隊の攻撃の際に、被疑者は全員死亡したと伝えられているが、事実はそれとは多少異なっている。特殊部隊の急襲の時点で 7 人のクラッカーはすでに死んでいたのだ。いや、正しくは死んだに等しい状況で横たわっていたのだ。この事は、「ごく一部の者しか知らない事実」というやつだが…

離島の上に小さなプロバイダー会社があった。掘っ立て小屋のような外観とは裏腹に、ハイスループットのサーバシステムに光ソリトンケーブル、そして自家発電装置が完備されていた。その掘っ立て小屋の一室でクラッカーたちは見つかった。「体感ゲーム」にでも使われているような<生体 - シリコンバッド>を、耳の後ろとこめかみにベストで貼り付けた状態で、全員ベッドに横たわっていたという。呼吸こそしていたが、もう二度と目覚めることはないように思われた。実際、極秘に運ばれた軍の医療機関で、すべてのクラッカーたちは時をおかずして眠るように息を引き取った。診断した医師の一人は、クラッカーたちについてこんな風に語っている。「まるで魂を抜かれたようだった」と…

クラッカーたちはサイバーテロのためにウイルスやワームを使ったわけではない、サーバをダウンさせるために特殊なパケットを発信し続けたわけでもない。彼ら自身が、正しくは彼ら自身の意識が、ネットワークの中に入り込み、ウイルスとして機能したのだ。光ソリトンケーブルの中に自らを、その魂を、情報としてアップロードしたのだ。政府による全ネットワークの物理切断により、その意識は二度と持ち主の下に戻ることはなかったようだが…

このような意識のアップロードについては、技術的に可能であるという研究成果がすでに数多く出されていた。ショウジョウバエからサルに至るまで、様々な生き物の遺伝情報から意識レベルでのアップロード例が報告されている。遺伝情報・意識情報を含め生体を光ソリトン通信網に送り込むことを、solitonize（ソリトナイズ）、ソリトン化と呼ぶが、人間での実験は、実際危険が大きすぎるという理由から、一切行われてこなかった。果たして人の意識が高速転送に耐えられるのか？

重篤な精神障害を引き起こすのではないか？その問いに答えられる者が一人もいなかったからだ。だが、彼らはそのラインをあっさりと越え、その上「ネットワーク攪乱」そして「原発のオペレーション・システムの支配」というミッションを完璧にこなしてしまったのだ。

すべての国が、極秘に軍事目的でのソリトナイズの研究を開始した。そして生まれたのが Cyber-Soldier、いわゆる Cy-Sol（サイ・ソル）である。資質があり、訓練を積んだ兵士であれば、ソリトナイズし、ネットワーク内で様々なミッションを十分に行うことが出来る。そして、これがサイバー・ウォー、電脳戦において最も有効な戦闘形態なのである。ソリトナイズしたサイバー・テロリストの攻撃を撃退できるのは、同じくソリトナイズしたサイ・ソルだけなのだ。

Virtual Realize（バーチャル・リアライズ：亜空間創造による情報の実体化）

バーチャル・リアライズ。それはサイ・ソルの実体化である。情報である我々が、物質化する方法だ。単なる作り話、怪談めいた物語として一笑に付されるべきものかもしれないが…　この現象は、ある戦略上の事故の際に偶然に発見されたものだと言われている。あるサイバー・フォース部隊が、西アジアの軍事拠点のコンピュータシステム上で作戦実行中に、猛烈なサイバーアタックをうけ、退路を断たれた。しかし、瀕死のはずのその電脳部隊がサイバー空間から飛び出し敵軍の真っ直中に亡霊のように現れ、持っていた重火器を用いて敵兵を倒したというのだ。結局、善戦むなしくそれら兵士は帰還することはなかったが･･･　そんな魔法のような「実体化」は、その部隊のｄＢによって行われたという。驚くべきことにｄＢにはそんな力があるのだ。しかし、その力を発揮するためには、いかなる優秀なｄＢであろうとも、代わりに自らの命を差し出さねばならない。エネルギーの大量消費が必要とされるからだ。実際ネットワーク内における我々のエネルギー源は自らの持っている「情報」である。エントロピーと呼ぶことも可能だが、我々は「情報」の一部をランダムノイズに還元することと引き替えに、行動している。通信、目的地への移動、そして標的の破壊。すべての行為が「情報の消失」によってなされている。ｄＢは通信だけではなく、部隊の保護という任務もあるため、膨大な情報とともに行動しているが、エネルギーの消費が激しく、もはや消費できる情報がなくなってしまったときは、自らの記憶を用いなければならなくなる。つまり、記憶をひとつひとつ捨て去って行くのだ。この行為は、どうしてか、生理的な痛みを伴う。自分の記憶をノイズに還元するのは、自分の指をむしり取って投げ捨てるのと同様な行為なのだ。サイ・ソルの実体化を支えるだけのエネルギーを得るためには、相当な記憶を失うことを覚悟しなければならない。部隊の人数が多ければ、きっと、自分の遺伝情報まで切り売りし、そして最後にはランダムノイズとして拡散することになる。つまり、死なのだ。部隊を救うために命を懸けられるのか？　その問いかけにＹＥＳと答えなければ優秀なｄＢとは言えない。しかし、私はどうだろう。確かに、自分の小指を切り捨てなければならない程度の危険な事態は幾度も経験している。だが、部隊を救うために、本当に死ねるのだろうか？　全身を自ら引きちぎるような激痛に耐えながら…

「亜空間創造」または「バーチャル・リアライズ」
という言葉を聞いたことがあるか？

それが唯一の望みだ

もし、君が部隊を救いたいのなら…

伝説のサイバーフォース：Cyber Force 2049

電脳情報軍の霧生尚道（きりゅう・なおみち）中尉が中心となり、2049年に創設された日本軍最初のサイバーフォース（電脳部隊）である。別名「レッドベレー」。司令官の霧生が紺色のベレー帽を好んでかぶっていることから名付けられたとの説もあるが、詳細は不明である。ただ、隊員の士気と霧生に対する忠誠心は極めて高く、全員霧生のベレー帽と同色の「紺色のリボン」をヘルメットに巻き付けて戦闘に臨んだと聞く。レッドベレーに関しては、南海の孤島にある第七軍事研究所でのサイバーテロリスト（ロスト・プロフェット）との電脳世界での死闘など語り継がれる逸話は多いが、その終焉に関しては諸説あり、真実は明らかになっていない。まさに「伝説のサイバーフォース」といったところか。なお、本部隊の構成兵士は霧生中尉の他、以下の５名である：

岡　一等通信兵（dB：部隊の防御と攻撃両面の要　兵籍番号 OP11789c）
佐伯　曹長（主に攻撃の主軸　兵籍番号 TH01365）
小島　一等兵（インタラプタ［情報還元銃］の射手　兵籍番号 RW97463）
吉井　一等兵（守備及び支援担当　兵籍番号 SG77210）
小田　一等兵（データ走査・分析担当　兵籍番号 KY46497）

天狼新星 関連作品

Sirius: Hyper nova

第一章：交雑機関

Chapter I: Hybridization Engine

2010 年、日本。大容量の情報 を超高速で受け渡しできる通信技術・光ソリトン通信 ・が今まさに世界規模で始められようとしていた。しかし、光ソリトン通信網 (ISOCOM-net) の中には、通信の障害となるばかりでなく、複雑化された端末をも破壊する可能性を秘めた -Solitary packet- と呼ばれる「正体不明のノイズ」が存在していた・・・ Solitary packet・・・ 自立的に自己増殖可能な独立した情報。いったい誰が、何の目的で？ それは意図的にネット上流されたものなのか？ それとも偶発的に生じたものなのか？ さまざまな憶測が乱れ飛ぶ中、Solitary packet の調査を行っていた対策チームが、最後にたどり着いた結論とは・・・

「その原因は・・・ 未来にある！！」

[公演記録]

二〇〇三年十一月二十日～二十五日 大塚・萬スタジオ

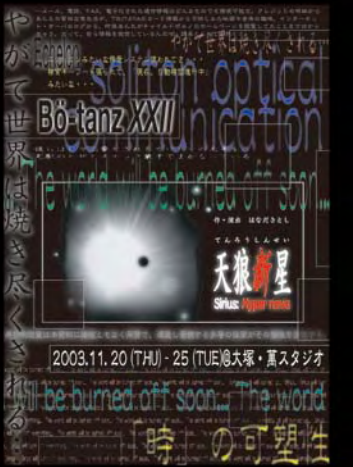
作・演出／はなださとし 演出補助／木村淳 舞台美術／吉田貴行（D. G工房）

照明／島田康和（S. P. C） 音響／畠山慎一（SOAP） 映像／中島一成（turtlemuseo）・はなださとし

映像プログラミング／川上琢史 制作／演劇レーベル Bō-tanz

<CAST>

大河内未紀／秋葉正子 岡島生／山口浩正 多川彩／羽鳥友子 澤山慎二／嶋田貴秀 辻村毅／千葉いづみ 吉谷紗英／永浦暁 松田由美子／原麻理子 宮田さん／高橋彰規 少女／市川麻美・市川好美 Hermit［隠者］・深尾大助／木村淳 林一等通信兵（dB）／酒田恵美子 片桐伝長／牧野達哉（S-Company）久保貴長／西村亮 奥山二等兵／八尾光弘 相馬二等兵／五月女和幸 Lucy S. Duner／榊鮎子 木島／川上琢史 佐藤さん／花田智



第二章：誘導原型

Chapter II: Induced Proto-type

2049 年、南海の孤島にある電子戦略軍第七軍事研究所。そこで行なわれている極秘の軍事研究「太陽系外探査プロジェクト」…それは未開の外宇宙を探査するための探査船の打ち上げ計画だった。そんな中、中枢研究者の一人が研究所のメインサーバーを突然叩き壊すという奇妙な事件が起こる。引き起こしたのは女性研究者の大河内志帆である。内部調査の嫌疑のために派遣されてきた中央憲兵隊捜査官深尾大助は、調査を進めるうちに、この「奇妙の事件」に隠された意外な事実を知る。大河内志帆はなぜコンピューターを破壊しなければならなかったのか？ 太陽系外探査プロジェクトの真の目的は？ 探査ユニットの打ち上げを 1 週間後に控えた研究施設に不正進入を繰り返すサイバーテロリスト「ロスト・プロフェット」。攻撃の要である一等通信兵を欠いた、対サイバーテロ部隊 Cyber Force2049 はロスト・プロフェットのサイバーアタックを撃退することが出来るのか？ それぞれの思惑が交錯する中、太陽系外探査ユニットを載せたロケット打ち上げのカウントダウンが始まる…

[公演記録]

二〇〇四年、十二月九～十三日。大塚、萬スタジオ。

作・演出／はなださとし 舞台美術／吉田貴行（D. G工房） 照明／島田康和（S. P. C） 音響／畠山慎一（SOAP） 映像／中島一成・川上琢史

制作／演劇レーベル Bō-tanz

<CAST>

深尾博之／木村淳 舞生雨道／西村亮 岡島天／牧野達哉 中谷晋也／嶋田貴秀 大河内志帆／羽鳥友子 君島亮／千葉いづみ 小宮孝子／酒田恵美子 サイバーフォース隊員・佐伯／高橋彰規 小島／佐藤貴由美 吉井／大田直人 小田／原麻理子 関川吉子／永浦暁 フェイント・ヴォイス名大河内通／市川麻美・市川好美 ロスト・プロフェット・大河内南／ラパウル幸子（劇団可燃物） 医師／吉田幸喜 警備兵／山本薫 移送班長／花田智

発行元・お問い合わせ

演劇レーベル Bō-tanz:

〒201-0013 狛江市元和東 2-15-15-205

e-mail: info@bo-tanz.org Tel&Fax: 03-3488-1224

http://bo-tanz.org

やがて世界は焼き尽くされる…